カードゲームの相手

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カードゲームの相手

【Ｎコード】
Ｎ１４２９Ｙ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
イギリスの話である。ある貴族はカードゲームの相手を求めていた。それに応じて屋敷に来たのは。実際に伝えられているお話を元にした作品です。

第一章

カードゲームの相手

これはイギリスに伝わる話だ。
ある貴族、この貴族の名前をさしあたってケンジントン卿としよう。ケンジントン卿はとにかくカード遊びが好きだった。とにかくカードなら何でもよかった。
中毒と言ってもよかった。それでだ。
朝も昼もカード遊びに興じていた。ポーカーでも何でもだ。
相手もだ。友人や親族だけでなく屋敷の使用人達でもだ。誰でもよかった。そんな卿についてだ。
周囲はだ。呆れながらこう言うのだった。
「もう病気だ」
「カードにしか興味がないのか」
「一体他のことについて考えたことがあるのか」
「あれでは何時か」
どうなるかともだ。周囲は話すのだった。
「破滅するぞ」
「カードによって破滅する」
「幾ら強くてもあれでは」
「カードに飲み込まれる」
「カードの中にいる何かに」
こう思いさえしていた。とにかくカード狂いだった。
そのケンジントン卿はこの日もだ。カードに興じていた。相手は屋敷の使用人達だ。友人も親戚も呼べる人間がいなくてだ。彼等を相手にしていたのだ。
しかしその彼等もだ。こう彼に言ってきた。
「すいません、これで」
「夜勤がありますので」

「失礼します」
「何、もうか」
そう家の者達に言われてだ。卿もだ。
残念な顔になる。それでだ。
彼等にだ。こう問い返したのだった。
「他に誰かいないのか」
「カードの相手ですか」
「私達の他に」
「そうだ、いないのか」
切実な顔でだ。彼等に問うたのである。
「誰かいないのか」
「しかし。もう真夜中ですし」
「今屋敷にいるのは私達だけですし」
「ですから」
「妻は友人達と旅行だ」
それに出ていたのだ。それでいない。
「息子達はそれぞれ大学だ」
「はい、そして執事のヘンリーさんもお休みですし」
「メイドの者達も今日は大抵実家に帰っています」
「それで屋敷にいるのは私達だけですから」
彼は使用人達にはいい主人だった。ただカード狂いなことだけが問題であるのだ。
しかしそのカードについてだ。彼はあくまで言うのだった。
「本当に誰もいないのか」
「何でしたらお酒を飲まれますか？」
「それでお休みになられては」
「そんな気分ではない」
しかしだった。卿はこう言ってその提案を断るのだった。
「やはり今はカードをしたい」
「左様ですか」

「どうしてもですか」
「それもポーカーがしたい」
切実になってきていた。顔も言葉も。
「是非共だ」
「しかしそれでもです」
「我々はこれから夜勤に入りますから」
「申し訳ありません」
「そうか。こうなったら」
ここでだ。彼はたまりかねてだ。こう言ったのだった。
「悪魔とでも勝負したいな」
「まあそう仰らず我慢して下さい」
「ここは」
「そうしかないのか」
苦い顔と声でだ。卿は使用人達に応えた。ここまで話してだ。
使用人達はそれぞれの仕事に戻った。こうして卿は自室に一人になった。だが、だ。
暫くしてだ。屋敷の扉をノックする音が聞こえてきた。その音を聞いてだ。
使用人達はまずだ。顔を見合わせて話した。
「こんな時間にお客様か？」
「まさかと思うが」
「そうなのか？」
いぶかしんだがそれでもだ。彼等は。
扉を開けた。するとそこには。

第二章

黒いタキシードを着た黒髪を後ろに撫で付けた男が立っていた。何か不気味で剣呑な顔付きをしていてだ。目には黒く不気味な光がある。

闇世の中に立つその男は異様に大きい。その彼がだ。使用人達に言ってきた。

「ケンジントン卿はおられるな」

「旦那様ですか」

「おられますが」

「そうだな。実はだ」

「実は？」

「実はといいますと」

「呼ばれたのだ」

そうだとだ。その男は言ってだ。

大股に屋敷に入っていってだ。そうしてだった。

使用人達が慌てて呼び止めようとするのも聞かずにだ。屋敷の階段を登り。

そのままだ。卿の部屋に入った。それを見てだ。

使用人達は呆然としてだ。また顔を見合わせて話した。

「あの方は誰だ？」

「見たことのない方だが」

「旦那様のお知り合いだろうか」

「どうもそうらしいが」

そのことはわかってもだった。

「しかし。あの様な方は」

「何と不気味な方だ」

「いきなり来られたし」

「訳がわからないな」

「本当にな」
「不吉なものも感じるな」
一人がこう言った。
「得体の知れない不気味さ」
「確かに。あの方からはな」
「黒い、そうしたものを感じる」
「全くだ」
そんなことを話しながらだ。彼等はその客についていぶかしんだ。しかし何はともあれだ。
主のカードの相手が見つかったのはよしとした。それはだ。
それでだ。彼等はだ。カードがはじまったのでだ。
早速だ。ワインとチーズ、それにサンドイッチを用意した。カードの際は手を汚さずに食べられるサンドイッチを食べるのが通例だ。それでだ。
そういったものを用意してだ。部屋に持って行った。そこで彼等が見たものは。
テーブルにだ。その男と向かい合ってポーカーをする主だった。彼は鬼気迫った顔で勝負に興じている。それに対して客はというと。
にこりともしないが余裕がある。その顔でだ。
彼もまた勝負をしている。その彼等にだ。
使用人達はだ。戸惑いながら声をかけたのだった。
「あの」
「・・・・・・・・・」
返答はなかった。どちらからも。
「食べ物とワインを置いておきますので」
「召し上がって下さい」
こう告げてだ。彼等は部屋を後にした。その間ずっとだ。
その部屋から退出してだ。今度は強張った顔になりだ。彼等は囁き合った。
「おかしいな」

「ああ、旦那様はカードの時は不敵な笑みを浮かべておられるが」
絶対の自信があるからだ。好きなだけあり強いのだ。
「しかし今はな」
「何かが違う」
「必死な顔で何かを守ろうとされている」
「そうした顔だったぞ」
「それにだ」
それに加えてだった。
「あの客人はな」
「何なのだ？本当に」
「旦那様とは違い余裕の顔だったが」
「一体何者なのだ」
「妖しいことこのうえないが」
その客が問題だった。一体何者かをだ。
いぶかしみながら考える。それが問題だった。
しかしだ。それからはだ。
夜の時間だけが進みだ。彼等は自分達の仕事を続けていった。やがて。
窓の外が明るくなってきた。朝になった。朝になるとだ。
部屋の扉が開きだ。中からケンジントン卿が出て来た。彼は部屋から出て使用人達にだ。こう言ったのである。
「何とか凌いだ」
「凌いだ？」
「凌いだのですか」
「そうだ、凌いだ」
そうしたというのである。

第三章

「私は助かったのだ」
「あの、一体」
「何があったのですか？」
「とりあえずだ」
憔悴しきりだ。今にも倒れそうな顔でだ。使用人達に言うのである。
「食べるものはあるか」
「あっ、サンドッチやチーズは召し上がられたのですか」
「ワインも」
「食べた。しかしだ」
それでもだとだ。彼は言うのである。
「朝だ。何かあるか」
「はい、それではです」
「パンを出してきます」
「それと紅茶を」
「頼む」
こう使用人達に言うのである。
「とりあえずはな」
「あの、旦那様一体」
「何があったのですか？」
「そういえばあのお客様は一体」
「何処に行かれたのですか？」
「帰った」
その謎の客人についてだ。卿は疲れきった顔で答えた。
そしてだ。まずはそのパンと紅茶を口の中に入れてからだ。それで言うのである。
「本当に。あと少し負けていればな」

「負けていれば？」
「どうなっていたのですか？」
「死んでいた」
そうなっていたとだ。彼は言うのである。
「私がな」
「あの。カードをやっておられたのですよね」
「あのお客様と」
「そうですよね。それでどうして」
「死んでいたのですか？」
「あの客は人間ではなかった」
そうだったとだ。卿は言った。
「悪魔だったのだ」
「悪魔！？」
「あのお客様は旦那様のお知り合いではなかったのですか？」
「悪魔とは一体」
「そんなことが」
「いや、悪魔だった」
間違いなくそうだったとだ。彼は使用人達に話す。
そしてだ。こう彼等に説明した。
「私は悪魔とでもカードをしたいと言ったな」
「はい、確かそんなことを仰っていましたね」
「そうでしたね」
「それでだ。私のその言葉に応えてだ」
それでだというのだ。その悪魔が。
「来てそしてだ」
「旦那様とカードをされたのですか」
「一晩の間」
「悪魔は言ってきた。悪魔のカード遊びはだ」
今度はそれはどういったものだったかというのだ。悪魔のカード遊びは。

「それは魂を賭けるものなのだ」
「ああ、悪魔だからですね」
「魂がチップになる」
「そうなるのですか」
「若し私が悪魔に敗れていれば」
その時はどうなっていたか。卿は紅茶を一口飲んだうえで述べた。
「魂を奪われていた」
「しかしそこを助かった」
「そうですか」
「本当に危うかった」
そうだったというのである。
「何とか生き残った」
「で、その悪魔は一体何処に」
「何処に消えたのですか？」
「姿を見ませんが」
「魔界に帰った」
そうしたというのだ。
「朝になりな。勝負に負けたままだったことを歯噛みしながらだ」
「魔界に帰ったのですか」
「そうして旦那様は助かった」
「そういうことですね」
「その通りだ。しかしもうだ」
疲れきりながらも命が助かりほっとした顔でだ。彼はまた言った。
「ああした馬鹿なことは二度と言わないようにする」
「悪魔とでもカード遊びをしたい」
「そういうことをですね」
「そうだ。そしてもう」
さらに言うのだった。その顔で。
「カードもだ」
「止められるのですか、もう」

「カードも」
「流石に懲りた」
それでだというのだ。話す口調はうんざりとしたものだった。
「だからもうしない」
「左様ですか」
「旦那様がそうされるとは」
彼等には信じられないことだった。しかしだ。
ケンジントン卿はこの日から何があろうともカード遊びをしなくなった。幾ら誘われても断る様になった。それは何故か。死を前にしたからだとだ。誰もが囁き合った。この話はケンジントン卿自身も使用人達も話さなかった。しかし何処からか出て来て伝わり今にも残っている。カードをするにしても迂闊なことは言ってはならないということである。ケンジントン卿は何とか助かったが他の人間がそうなるとは限らないのだから。

カードゲームの相手　　完

２０１１・９・２６

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1429y/

カードゲームの相手

2011年11月2日02時04分発行